

絆

—きずな—

新たな「まちづくり」を求めて！
社会教育委員からの提言

「家庭教育」を基本とした、新たな「まちづくり」の視点にたった生涯学習の在り方について、3人の社会教育委員さんから提言がなされましたので紹介します。

須恵町立須恵第二小学校校長

羽原 哲男さん

「教師と子どもの絆」



羽原さん

「僕のことをすべてわかってくれている。平井コーチがいなかったら今の僕はない。」

北京オリンピック競泳男子平泳ぎ100m、200mで金メダルを獲得した北島康介選手の言葉です。平井コーチは、中学2年生の北島康介選手の間を見て、この子を将来オリンピック選手に育てると決めたそうです。北島選手は、大会が近づくと中学生の時から目つきが豹変しましたが、コーチの言うことをよく聞く素直な子でした。このような平井コーチと北島選手のような関係を学校の教師と子どもに置き換えて考えてみました。子どもは、無限の可能性を持っていると言われて

います。その可能性を引き出すことができるのが、教師だと思います。

教師は、子ども一人ひとりの個性を大切に、その子の良さを伸ばそうと努力します。その教師の子どもに対する思いが強くなり、やがて情熱的な指導に変わってきます。子どもたちは、教師の言葉かけや励ましにたいへん敏感です。

「自分のことを心配してくれているな。」「困ったときに励ましてくれたな。」

そう感じた時、教師に対する信頼が生まれます。小学校の子どもたちを考えてみると、低学年では、担任の先生が言うことを絶対的に聞き入れることが多いようですが、中学年になると、教師に対する見方が変わってきます。

自分のことをどう思っているのだろうという考えが芽生えてきます。そして、高学年になると、教師の言動に対して鋭い見方をするようになります。

したがって、教師が子どもの成長を的確に見極め、情熱を持って指導に当たらなければなりません。教師と子どもの絆を強くするためには、まず、教師自身が子どもの成長に大きな影響を及ぼすことを自覚して、教師としての資質能力を伸ばさなければなりません。また、経験の長短にかかわらず、絶えず研鑽に励む必要があります。

平成17年10月に出された中央教育審議会の答申では、揺るぎない信頼を確立する「教師の質の向上」と題して、

社会教育委員…
学校教育および社会教育の関係者ならびに学識経験のある人から選考され、社会教育に関し、教育長を通して教育委員会に助言を行うため、教育委員会から委嘱された人です。

3点からあるべき教師像が明示されました。①教職に対する強い情熱、②教育の専門家としての確かな力量、③総合的な人間力、です。

学校では、子どもたちにとって、教師が一番の教育環境と言われています。その意味をしっかりと考えて教壇に立たなければなりません。

そして、十分に意識して教壇に立てば、教師と子どもの信頼関係は、自然に生まれてくるのではないのでしょうか。子ども一人ひとりに愛情を注いだ学級経営、子どもの気持ちを大切にした生徒指導、わかる・楽しい授業を目指した学習指導などが教師と子どもの絆を強いものにすると思います。

成長した子どもたちが、自分の担任の先生は、私のことを大切にしてくれ、熱心に勉強を教えたと言ってくれるように、日々の教育活動を充実させる必要があります。

「絆〜子どもと地球と〜」

有識者

森永 希代美さん

私はニュース番組が好きで、朝お弁当を作りながら、夕方夕ご飯を作りながら、夜晩酌しながら、いろいろな放送局のニュースを見ていますが、明るいものより暗い内容のものが多いことが悲しく感じています。

特に、子どもが犯罪に巻き込まれる事件は子どもが被害者の場合でも、加害者の場合でも、自分に置き換えて「この子の親はこの子にどのように関わったんだらう?」「私は今のままで子ども

もたちはまっすぐ育つんだらうか?」そんなことを考えながら見えています。

子どもが何を考えているか、漫画や小説の世界では頭の横に吹き出しが出ていてすぐにわかるのですが、現実には子どもの言葉や微妙なニュアンス、目や手などの体の動きなどから判断するしかなく、親としてはアンテナの感度を最大値にして理解しようとしています。

それでも、子どもたちは人を傷つけるようなことを言ったり、人に迷惑をかけるようなことをしたりして、そのたびに、何が悪いのか、何が足りないのか、どうすればよかったのかと考えますが、末だに答えは見つかっていません。

もつともつと、一緒にいる時間を増やして、もつともつと会話をし、子どもの目線まで下りていって、子どもの考えていることを理解しようとすればいいのでしょうか? たぶんそれは、正しい回答のなかの一つではあるのですが、それだけでは足りないと思います。何が足りないのかはまだ見つかっていません。

ところで、ニュースになる話題の中

で、子どもの事件と同じくらい気になる話題に「地球温暖化」があります。



子どもの目線まで下りてみると普段とちがう世界が見えるかも (東幼稚園運動会)

北半球の日本という国で生活している私たちには、生活に困るような地球温暖化の影響は感じていませんが、北極海では氷の面積が少なくなっており、氷の面積が少なくなると、赤道上の海抜が低い国では海面が上昇して住んでいる土地が水没したり、命が危険にさらされている人たちがいることをご存じですか?

便利な生活に慣れて電気や石油をたくさん使って楽をしている先進国のツケが、便利な生活をしていない地道に素朴に生活している発展途上国の人たちや動物たちに回っていることに気がついて、先進国の私たちは少し不便でも地球に優しい生活を始めるべきではないかと思えます。

親子の絆を深める方法の一つとして、対話しながら同じ価値観を育てていくことがあると思いますが、その話題の中

一つに私たちと同じ地球に暮らす人たち・動物たちとの絆について語りあっているのを見つけてみてはいかがでしょう? 自分ではないだけれど、何ができるのか、みんなが少しずつ考えれば悲しい事件も減るのではないかと期待します。

我が家でも、時間を作って子どもたちと地球との絆について話してみようと思います。